古本屋の戦後

「タンポポ書店」の場合

片岡千歳

「タンポポ書店」は昭和38年創業ですから――古本屋の戦後――というこのシリーズからはピントがずれていることをお断りしておきます。

夫はさまざまな仕事の遍歴のすえ、生活の安定を考えて警察官になりました。そのころ私たちは結婚しましたが、警察官になりきれなくて辞めてしまいました。

「暮しの手帖」で、自転車で立場まわりをする古本屋さんの記事を読んでヒントを得た夫は、古本屋を開業することにしました。昭和38年5月のことです。資本は、三千円で買った中古の自転車と、自分たちのささやかな蔵書、立場まわりの資金三千円、それとなにより二十七歳という若さでした。

場所は国鉄高知駅から二つ駅西にある旭駅の近くに実家があり、一部が店舗で、そこで叔父が骨董屋をしておりました。古い家具や大きな瓶、土佐の皿鉢料理に使う大小様々の皿鉢などが並ぶ店の端に、半間の本立てを置き手持ちの本を並べました。その前二三日旭駅前で、木箱の上に戸板を置き古本を並べてみたけれど、通る人に見向きもされず、止めてしまいました。けれども夫が本気で古本屋を自分の仕事にしようという固い意思をその時に感じました。

旭駅前通りに四坪の貸し店舗を見つけて、そこを借りることにしました。屋根の上にトタンを張りつけた看板があって、塗料を買ってきて、夫が自分で「タンポポ書店」の看板を書きました。長女が二歳になっていて、親子三人の生活は食べるのがやっとでした。本棚も、お金が出来たら材料を買って夫の手作りで、ひとつづつ増やしていきました。夏の暑い日、リヤカーに往きは娘と私が乗り、帰りは板材の間に娘を乗せて、夫のひくリヤカーを私が押して来たことでした。ざっとした仕事のことをハナクソアンドン（鼻くそで行灯を貼る）と言う言葉が土佐にありますが、夫の手作りの本棚は、仕上がりは早いが、まさにハナクソアンドンでした。

「本屋をたたむとき楽でいい」などと自嘲していましたが、大工さんに頼んだりすることも出来ない経済状態でした。ひとつひとつ作るうちに勘どころを会得したものか、三十年たった現在もその本棚を使っています。二三年前デパートから撤退する書店さんから「本棚を差し上げます」というありがたいお話がありましたが、創業のときの思いもあって辞退したことでした。

私たちは詩を書いていて出会ったのでした。商売はズブの素人です。詩書を沢山集めて渋谷の中村書店のような古本屋を目指していました。二十代の初め中村書店で「左川ちか詩集」を尋ねたら、細身の黒シャツの店主が、たちどころに裏から出してくれて買わせて頂いた、あの時の感動が忘れられなくて、詩書を専門にした古本屋を夢見たのです。

詩書は売れないことをまもなく知ることになりました。でも意外に高く売れることも知りました。夫が立場で見つけた「萩原恭次郎詩集」をなるべく長く手元に置きたくて、自分たちとしては法外な値を付けたつもりが、一週間もしないうちに売れてしまいました。珍しい、いいものはこんなちっぽけな店でも売れるという、商売の面白さをこの時覚えたと思います。

旭駅の北のほうに、高校野球で有名な高知高校があり、学生が参考書を売りにきます。新刊書同様にきれいなので安ければ売れると思いずいぶん買いました。たまに売れましたが、買うのは先生とおぼしき大人ばかり、学生は売り方専門なので、在庫は山と残り、参考書は買わないことにしました。

今は車でどさっと売りにくるお客様がほとんどですが、その頃は手で提げられるだけ持ってこられるのが普通でした。僅かなお金で売り買いするのですから、大きな包みを提げて店に入ってこられるお客様を見たら、私は近くの姑の家にお金を借りによく走ったものです。

その頃四国地区では年一度だけ市がありましたが、お金がないので、なかなか出掛けることができません。夫は蔵書家の友人に頼んで委託販売をさせてもらいました。持ち主に売値を付けてもらい売れた時に二割こちらが頂くというやりかたです。友人に恵まれてずいぶん助けていただきました。

旭駅前通りでは三年やりました。高知市の中心地に老舗の井上書店がありますが、そこから電車道を隔てたところに貸し店舗を見つけて移りました。家賃は前のところの三倍でした。でも売上もそれに添ったもので、素人商人の私たちはヘンに感心したことでした。家賃が大きくなると、諸経費も多くなり、家族が増えたり生活はなかなか楽になりません。月末になると井上書店に本を持っていっては家賃を拵えたことでした。

運送業界にいた親類のものが、声を掛けてくれて夫はトラックの運転手のアルバイトをはじめました。その間店は私ひとりでやらなくてはなりません。古本屋とトラックの運転手という二足のわらじを、夫は十年余り履くことになります。

「タンポポ書店」の店名は、W・ボルヒェルトの詩句から夫が付けました。この中心地に来てお客様も増えて軌道に乗ってきた感じでした。綿毛になってふわふわと飛

金沢書友会
第三回共同目録
十一月下旬発行
A5判約50頁二五〇〇点掲載。
御希望の方は90円切手同封の上
左記までお申込み下さい。
〒920 金沢市安江町一―十一
近八書房内　**金沢書友会**

んでいくタンポポという名前のせいか、またしても今度は家主の都合で引っ越すことになりました。やっと見つけたのが現在の店です。

大阪の杉本梁江堂さん、亡くなられた吉永平凡堂さんがリーダーになって、西武デパートで第一回の古書展を開きました。昭和53年のことでした。大阪・神戸・岡山・高松からも同業の先輩が参加して下さり、県外の市にも出掛けず我が店頭だけでほそぼそと売買していた私たちには、いい刺激になりました。

店では手にとって見る人はいても、なかなか売れずにいた「高知県農地改革史」が開店とともに、エスカレーターを駆け上がってこられたお客様が叫ぶように本の名を言って買ってゆかれました。後で他のお客様に伺ったことですが、古書展催事場は六階です、エレベーターとエスカレーターとどっちが早いか、開店前に待ち構えていた人達で議論をしていたようです。

年に一度の古書展は、愛書家もブックハンターもそして業者の私たちもお祭りのような雰囲気でした。お客様の要望で年二回開催したことが二三年ありました。82万県民の図書費としたものが、限りがあって、結局年一度にもどし今年は二十一回目の古書展でした。長い年月には諸先輩の業者にもいろいろな事情でメンバーが変わって、杉本梁江堂さん、彦書房さんそしてタンポポ書店の三店で定着した感じです。私の目下の気掛かりは地元の他の本屋さんに参加してもらえないでいることです。

古書展が済んだら、その日から来年の古書展の準備が始まります。

広く明るいきれい安い方式の古本屋が、高知にも幾つかあるようです。近くのお店を見せてもらいましたが、キャッチフレーズどおり広く明るいきれいで新刊書店のようでした。値段は一概に安いとは言いがたいと思いました。広くて量が多い所にお客様が流れるのは当然の現象かとも思いました。せっかく来たので一冊でも買いたいと探しましたが、買いたいと思う本がありませんでした。こうした方式の店舗を歓迎されるお客様が多いように思いますが、物足りなく感じるお客様も少なくないと思いました。

平成四年夫は亡くなりました。私たちには三人の子供がいますが「タンポポ書店」は四人目の子供のようなものです。幸い子供たちは成人していましたが、それぞれの道があって店は私一人に残されました。本の買い方、補修の仕方それから諸々夫のやり方をなぞって、一日でも長くこの店を続けたいと思います。

沢山の友人が心を寄せてくださって、追悼集「きさらぎタンポポ」ができました。いつの日か出版も手掛けたい思いを抱きながら、ついに果たせなかった夫の思いを込めて、彼の手作りの看板を「きさらぎタンポポ」の奥付けに使いました。

新刊も古本も溢れている昨今の状態です。それが本の探求を一層困難にしているとも思います。多少手続きが面倒でも通信販売が有効な手段であることは、探求者も古本屋も一致しているところです。

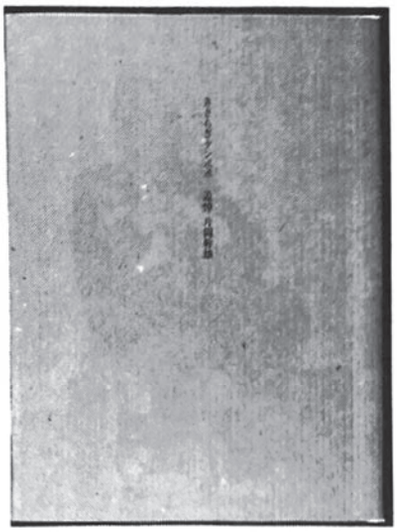
夫の病状が思わしくなく、店を閉める日が続くので、通信販売を始めました。何とか収入を得る必要があったのです。

必要に迫られてはじめた通信販売でしたが売れるときも売れないときもあります。原因は商品の問題、評価が適正であったかどうか、いろいろありますが、真に欲しい人にこの本を届けるという作業が、私は楽しくてなりません。かつて夫は、本を売るのは、娘を嫁にやるようなものだと言っていました。どんな本もぐんと安い値を付けて棚に置けば、何時かは売れるに決まっているけれど、本によってはそれなりの値を付けて売ってやりたいし、そのほうが本も喜ぶと思います。

又、全国に散らばっている高知ゆかりの本をなるべくこちらに引き寄せて、我が店の棚に置きたいと、あちこちから頂く本の目録に目を配ります。その本に出会って喜んでもらえる機会が多いのは、何といっても地元ですから本のためにも嬉しいことと思います。

この本の一行でも出会って喜ぶ人がいるのではないか、と思うと無下に本が捨てられません。たちまち古本の山が出来、埋まるようにしてカウンターの前に座っています。夕方には自転車が並ぶ店の軒下に、何処から飛んで来たのか、僅かな窪みに小さなタンポポの花が今年も咲いて、ついこの間までありました。これは創作ではありません。本当の話です。

（高知市・タンポポ書店）



平成5年2月刊「きさらぎタンポポ
―追悼片岡幹雄」

BY APPOINTMENT TO
HER MAJESTY THE QUEEN
PURVEYORS OF RARE BOOKS
& MANUSCRIPTS
MAGGS BROS LTD LONDON

Maggs Bros. Ltd.
Rare Books
autographs, manuscripts
and miniatures

イギリスで150年の歴史と伝統を誇る王室御用達の古書専門店
英文学、自然科学史から旅行関係まで幅広いジャンルに渡って豊富な取り揃え

50 Berkeley Square London W1X 6EL
Tel: (0044) 171 493 7160
Fax: (0044) 171 499 2007
日本語担当：タイタス　ボーダー